



嗜虐の艦隊 南洋の虜囚

DOJIN
R18
成人向け

※18歳未満の
購入・閲覧禁止

嗜虐の艦隊 南洋の虜囚

桐嶋誠一郎



伏龍齋

私と関わり、豊かな刺激と閃きを与えてくれた全ての人に。

また、創作の機会を与えてくださった「艦これ」運営鎮守府、
素晴らしい絵で作品に躍動感を与えてくださった瑠璃ららこ先生、
そして、新たなインスピレーションを与えてくれたM、J、Nに。

目次

01 隠所.....	4
------------	---

01 隠所

ソロモン諸島、ブーゲンビル島。この島の南端に、日本の海軍が建設した要塞がある。ブイン基地と呼ばれる、鎮守府の一つである。その基地にある、本来なら使われていない筈の施設内、とある一室。重厚な鉄製の扉で通路と仕切られたこの部屋は、『便所』と書かれた札が、まるで表札のようにかけられていた。

「んじゆる…♥ じゅ、ちゅ、じゅうっ…♥ ちゆるっ、ちゅ、ちゅうっ…♥」

表札に書かれた二文字とは裏腹に、室内は便所といった趣ではなかった。床も壁もコンクリート打ちっばなしという殺風景なこの部屋は、むしろ監房と表現すべきであろう。壁は一面だけが全面硝子張りとなっているものの、カーテンが閉められており、窓の向こうは見えない。光源は蛍光灯だけで、十二畳ばかりの室内は何処か薄暗かった。

「じゅうっ…♥ じゆる、ちゅ、ちゅっ…♥ ん、じゆるっ、ちゅうっ…♥」

部屋に、いやらしい水音が響いていた。女が、女に奉仕している音である。

二人は共に、一糸たりとて衣服をまとっていなかった。どちらも、下着を含めて全ての服を脱ぎ捨てていた。だが、どちらも全裸でありながら、この二人は極めて好対照であった。

一人は椅子に座って背中を預けているが、もう一人は床に直接正座している。一人はゆったりとくつろいでいるが、もう一人は相手の股間に顔を埋め、熱心に奉仕している。一人は浅黒く健康的な肌をしているが、もう一人は雪のように白い、透き通った肌をしている。何もかもが、対照的な二人だった。同じ所といえ、全裸である事、後は互いの見事な銀髪ぐらいであったろう。

浅黒い肌の女一武蔵が、雪肌の女を見詰めている。自らに奉仕する、家畜を。その透き通るような肌は病的なまでに白く、にも拘らず肌理細かく、美しい。日本人、もしくは艦娘という訳ではなさそうだった。だが、白人にも見えない。人の形をしていながら、何処か、人間とは違う存在に見えたのである。

「んじゅ、じゅうっ…♥ じゅ、ちゅっ、ちゅうっ…♥」

雪肌の女は、武蔵に奉仕していた。武蔵の股間に屹立した、肉棒に。

言うまでもないが、武蔵は女である。全身から、蠱惑的な美しさと凶暴な危うさが同居した、女豹のような色香が漂ってくる。その身体の何処を見ても、男である筈がなかった。秘部の、本来クリトリスがあるべき場所から生えた肉棒以外は。

「ちゆるっ、じゅっ…♥ んじゅっ、じゆるっ、じゅ、ちゅ、じゆるっ…♥」
だが、雪肌の女は気にしない。彼女にとって重要なのは、そこに肉棒が、男性器があるという事実そのものだった。だから、奉仕する。なるべく下品に、なるべく卑しく、奉仕する。その姿は、肉棒に口で奉仕する…というような、その程度の生ぬるい表現ではとても、描写できない。もっと端的に言うべきだった。そう…例えば、雌豚がちんぽにむしゃぶりついている、というように。

「ちゅうっ、ちゅ、ちゆる、ちゅっ…♥ じゅう、ちゅ、んちゅっ…♥」
（ああっ、おちんぽ、おちんぽお…♥ おちんぽ好き、すき、すきっ…♥ おちんぽ大好き…♥ おちんぽお、おちんぽお…♥）

ちんぽを咥え込んだ口は、時に吸い上げ、時に唇で締め付けている。故に口での呼吸はできず、奉仕の合間合間に鼻で呼吸するしかなく—その鼻息は荒い。顔には赤みがさし、彼女が酸欠気味の状態にある事を示している。だが、彼女は奉仕をやめようとはしない。どころか、より激しく、ちんぽにむしゃぶりつく。

「くす…♥ 可愛いねえ…一昔前とは、偉い違いだ…♥」

その様子に、武蔵が小さく笑みを零す。優しい笑顔であったが、しかし、よく見ればそれが、人を見る時の表情ではない事に気付いただろう。それは、ペットを見る時の顔だった。家に来たばかりの頃は所かまわずおしっこしていた子犬が、今はきちんと定められたトイレで排泄するようになった…その成長を喜び、飼い主が目を細める。武蔵の浮かべた表情は、そういう類のものである。

「ほーんと…♪ 夢中でおちんぽにしゃぶりついてるもんねえ。可愛いもんだよ。見違えたね…いい、便器だ♪」

楽しそうな声が、聞こえた。

この部屋には、都合三人の女がいた。奉仕する女と奉仕される女以外に、もう一人、傍観する女がいた。彼女は、部屋の端のベッドに座って二人の様子を眺めていた。椅子に座って奉仕を受けている武蔵と、その武蔵のちんぽに奉仕している雪肌の女、双方の様子をである。特徴的な長髪を背中まで伸ばし、楽しそうに二人の様子を眺めている彼女は、隼鷹であった。

隼鷹にとって武蔵がどういう存在か、一言で表す事は難しい。ただ、武蔵のあのちんぽは、隼鷹が普段吸い付いてるものであるというのは、確かな事だった。二人がベッドを共にする事は珍しくなく、その度、武蔵は隼鷹を愛したし、隼鷹は武蔵に奉仕した。それは、日常であった。その日常が、目の前で他者によって展開されている。だがその光景は、隼鷹にとって、嫉妬の感情を引き起こすもの

ではなかった。

その理由は、隼鷹の台詞の中に現れている。彼女は言った。「便器だ」と。この雪肌の女を、便器と、肉便器と表現した。それは、比喩ではなかった。故に、嫉妬などする筈がなかったのである。目の前の光景は、言ってしまうと、武蔵が電動オナホールにちんぽを突っ込み、スイッチを入れた…そういうものなのだ。オナホールに嫉妬する阿呆が、何処にしようか。

「んじゅっ♥ じゅるっ、ちゅ、ちゅる、ちゅうっ♥ んじゅ、じゅう、じゅううううっ…♥」

（ああっ、ありがとうございますっ、ありがとうございますっ♥ 私は便器ですっ♥ 便器っ♥ 便器いっ♥ お便所ですっ、おちんぼ様にご奉仕するお便所っ♥ 精液とおしっここの処理がお仕事のっ、お便所おっ♥）

一方、雪肌の女は、その「便器」という単語に明らかに明らかな反応を見せていた。彼女が反応したのは、「可愛い」ではない。武蔵も隼鷹も言った「可愛い」という言葉には一切、反応していなかった。彼女が反応したのは、あくまで「便器」という言葉である。控えめに言って、人を表現する言葉としては、罵倒にしか使えないような表現だ。

にも拘わらず、彼女はその表現を悦んでいた。全身を震わせるほどの歓喜と共に、亀頭を咥え込んだ口でちんぽを吸い上げ、同時に上を向いている。ちんぽを咥えたままだから、そんなに上を向ける訳ではないが…それでも、必死なほど上目遣いになって、その黄水晶のような瞳を武蔵に向けている。

もし武蔵が背を真っ直ぐに立てていたら、その豊富な乳房が邪魔をして、何も見えなかつたろう。幸いな事に、彼女は背もたれに体重を預けてくつろいでおり、それ故に、黄色い瞳を見る事ができた。歓喜と肉欲、淫欲と喜びに彩られた、黄水晶を。

「おやおや…♪ 凄い顔だねえ…♥」

その無様さに、武蔵が喉を鳴らして笑った。笑って、嗤った。口角を吊り上げ、薄笑いを浮かべ、嗤う。便所と呼ばれ歓喜し、ちんぽを離さず利用者を見上げる、その無様さを。

これが漫画なら、瞳にハートマークが浮かんでいるところである。それほどまでに、雪肌の女の顔は蕩けていた。大好きなちんぽにむしゃぶりつき、便器と呼ばれて飛び上がらんばかりに悦び、とろとろに蕩けた瞳を利用者様に向ける。美人、麗人と評すべき整った顔は、じつとりと浮き出た汗と口元を汚す唾液、それ

に激しいフェラチオの中で垂れた鼻水で、台無しになりつつある。それでも、彼女は笑っている。締めりのない笑顔を、向けている。私は幸せですと。利用者様にご奉仕できて、利用者様に便器と呼んで頂けて、幸せですと。

「よしよし…♪ くくっ…♥」

ただくつろぐばかりで奉仕させるだけだった武蔵が、手を伸ばした。雪肌の女の、その艶やかな銀髪を、くしゃりと撫でた。乱暴な指使いだった。普通の女に対してやれば、折角セットした髪型が崩れると、怒られても仕方のないものである。

だが、雪肌の女は、蕩けた黄水晶を上目遣いにしたまま、嬉しそうな視線を送ってくるばかりである。故にか、武蔵がもう一度、喉を鳴らして笑った。同時に、髪を撫でるのをやめ、代わりにむんずと頭を掴み—

「んごっ!?♥」

股間に、押し付けた。雪肌の女の頭を掴んで、ちんぼを咥えたままの彼女の顔を、自らの秘部に押し付けたのである。顔は股間に埋まり、剛直と言えるほどに勃起したちんぼは、喉の奥を通して食道にまで入り込む。その喉からは、同時に、靴底で踏みつぶされた蛙のような、惨めな断末魔が聞こえてくる。食道に入り込んだ亀頭は気道を塞ぎ、呼吸を不可能にする。

喉や食道に異物が入り込むと、人は反射的に嘔吐感を覚える。いわゆる嘔吐反射である。ちんぼという異物に入り込まれた食道は、嘔吐感という名の強烈な不快感を脳に向けて発信しながら、異物を追い出そうと運動する。だが、食道の粘膜が多少動いたところで、ちんぼほどのものが追い出せる筈がない。結局それは、ちんぼを楽しませる為の、オナホールの蠢動でしかなく—同時に、本人を、雪肌の女を苦しめる拷問でしかない。

(ああ、ちんぼきたっ、ちんぼきたっ、ちんぼぎだっ♥ 好き、好きい…♥ これ、好きい…♥ 無理矢理ちんぼ…♥ 喉の奥までおちんぼ…♥ おちんぼ…♥ お願いします、使って、使ってください…♥ 使って…私を、使ってえ…♥)

だが、彼女は喜んでいた。苦しんでいない訳ではない。生理反応でちんぼを吐こうとし、しかし吐けずに食道を抉られ続け、同時に呼吸までも阻害される。それは、間違いなく苦悶であった。だが、彼女にとって、苦悶は最高の快樂を引き出す調味料だったのである。

「お…ご…♥ お…え`っ、え`っ…♥ お`…げ、え`えっ…♥」

可憐な乙女とでも評すべき雪肌の女が、しかし可憐な女であれば絶対にあげて

はいけない類の呻き声をあげる。彼女は、その呻き声にすら、悦んでいた。

便器として使われる。道具として使われる。それは、彼女にとって歓喜であった。人間扱いはされない事。家畜や道具として扱われる事。人権を蹂躪され、尊厳を踏みにじられる事。玩具として使われる事。そういった事に、彼女は無上の喜びを見出している。

（お願いします…♥ 私を、使ってください…♥ 私を使って、気持ちよくなってください…♥ 使って、使って…私を、使い潰してください…♥）

蹂躪される喜び。踏みにじられる喜び。それは、破滅の喜びに他ならない。道具として扱われる事は、人としての破滅である。故に彼女は、道具として扱われると悦ぶ。無様な呻き声をあげるのも、人として、また美人としての破滅である。故に彼女は、自分があげた惨めな声を聞いて、より興奮する。窒息する事は、生物としての破滅である。故に彼女は、酸欠に顔を赤くしながらも、抵抗しない。武蔵の気分に、武蔵のちんぼの機嫌に、自らの命すら預け一股を濡らす。

「あーあー、酷い事するねえ…♪」

隼鷹は、雪肌の女の丁度、斜め後ろに座っていた。故に彼女の顔は見えないが、何をされているかはよく見える。頭を押さえつけられ、顔を股間に押し付けられ、根元までちんぼを咥え込まされている様子自体は、見えている。哀れな呻き声を聞きながら、しかし、隼鷹は楽しそうに笑っていた。その口調も決して、非難するようなものではない。愉快そうに、面白がっていた。彼女の喉奥から漏れ出てくる呻き声は、とても笑えるようなものではないが、それでも面白がっていた。いじめっ子の取り巻きが、踏みつけられるいじめられっ子を見て楽しむ、あの笑顔浮かべている。

「何が酷いものか…♥」

だからだろうか。武蔵も、楽しそうに笑う。愉快そうに、面白がって笑う。何が酷いものかと。これの何処が酷いのかと。笑ったままその艶やかな銀髪を掴み、無造作に引っ張り上げた彼女の顔を、隼鷹に向けた。

「えへ、へ、へへっ…♥」

そこにあったのは、壊れた玩具だった。断じて、人間ではなかった。彼女が浮かべていたそれは、人がしている表情ではなかった。自分が人間だという自覚があるのなら、浮かべてはいけない顔。破滅の快樂に酔いきった、壊れた人形の顔である。

「もっとお…♥ お願いします、もっと、してください…♥ もっと使ってく

ださい…♥ 使って…私を、ぶっ壊してェ…♥」

目尻からは涙が零れ、頬を伝っていく。だが、その涙は悲哀を表すものではない。食道を抉られ、生理反応によって流れ始めた雫は、断じて悲しみの涙ではなかった。それは、歓喜の涙である。道具として使ってもらえる、人としての尊厳を蹂躪して貰える…それは、彼女にとってのご褒美だ。そのご褒美に歓喜する、涙であった。

その雫を零す目は、隼鷹を向いているが、しかし隼鷹を見てはいない。虚ろな瞳はぼんやりとして焦点が合っておらず、ただ虚空を見詰めている。失明しているのではない。壊れてしまった彼女は、目の前にいる隼鷹を見る事すら、できないのだ。

「…♥」

壊れた玩具の顔は、隼鷹を発情させるに十分な威力を持っていた。ぶるっ、と全身を震わせ、さっと頬に赤みがさす。既に壊れた玩具へと成り下がりながら、それでも破滅を願う肉便器。武蔵の肉棒が、彼女をここまで追い込んだのだ。あの愛しいちんぽが。雪肌の女の唾液で妖しく光る、あのちんぽが。

ごくり、と隼鷹の喉が鳴った。この壊れた玩具の顔は、下品で卑しい。だが、武蔵に愛されている時の自分も、大差はないのではないだろうか？ 大好きな武蔵に抱かれ、犯され、虐められ…その愛を一身に受けている時、自分が浮かべている顔。それは、とろとろに蕩けたメスの顔である筈だ。

毎晩のように武蔵に愛されてきた記憶が、まるでフラッシュバックのように蘇る。激しいキス、逞しいちんぽへの奉仕、力強い腕に押し倒される恍惚。互いに愛し合う仲だというのに、それでも隼鷹は、力尽くに押し倒されるのが好きだった。自らの両手首を掴まれ、ベッドに押し付けられる。一切の抵抗を許されず、武蔵の雄性の象徴を秘部にあてがわれる。それだけでもう、イってしまいそうだった。

一欲しい。

ちんぽが、ではない。武蔵が欲しい。愛する武蔵が。武蔵を愛したい。武蔵に、愛されたい。武蔵と、愛し合いたい。大好きな武蔵と。愛する武蔵と。他の誰でもない、武蔵と。

「くす…」

隼鷹のそんな気持ちを、武蔵は見透かしているらしい。両手を広げ、首を傾げた。本来片手は、雪肌の女の頭を掴んで塞がっている筈なのだが一手を離すと、

無造作に床へ転がしたのである。

「おいで…♪」

ぞくり、と隼鷹の背中を何かが走った。蛇が背筋を這いまわるようでもあり、背骨を電撃が走り抜けるようでもあった。子宮が締め付けられるような感覚に襲われ、神経が昂る。

気付いた時には、隼鷹はベッドから降りて歩き始めていた。いつベッドから降りたのかは、判らない。本当に、気付いた時には歩き始めていた。夢遊病者のような覚束ない足取りで、しかし迷う事なく、武蔵へと向かう。大好きな武蔵の下へと、向かう。

「んっ…♥」

隼鷹と武蔵の唇が、重なり合う。唇と唇が触れ合うだけの、親愛のキスである。歩いて来た隼鷹は中腰になって、雪肌の女を足元に打ち捨てた武蔵は座ったまま、唇を合わせる。自分を見失うほどに発情した隼鷹から仕掛けた割には、甘い、初心な恋人同士のようなキスであった。

「んっ、ちゅっ…♥ ちゅ、ちゅうっ…♥ じゅ、ちゅう…♥」

無論、そんなキスが長く続く筈もない。隼鷹が僅かに顔を引いて唇を離れたかと思いきや、口を開け、武蔵の唇に吸い付く。ついでに、唇の内側の粘膜で武蔵の唇を味わう。

こうなってしまうともう、なかなか止まらない。何度も何度も、ついでに。ついでに、味わう。大好きな人の唇を。そうしていると、武蔵の方でも口を開け隼鷹の唇をついでに。ついでに、ついでに、ついでに、ついでに。それは、愛の交歓だった。愛する者同士が、愛を交わし合い、確認し合う行為であった。武蔵の両手が隼鷹の背中に回り、緩く肩を抱いている。

「えへ、えへっ、えへ…♥」

蚊帳の外に置かれたのは、雪肌の女である。武蔵の足元に転がって、壊れた笑い声をあげ続けている。どうやら、半分トんでしまっているらしい。そして、その笑い声がまた、二人にとっては心地よかった。その声は、丁度、気分を盛り上げる BGM の役割を果たしていた。

結局、彼女はその程度の存在であった。道具であり、玩具であり、便器であった。肉便器でしかなかったのだ。もし、二人に人間として認められていたなら、ここで地面に打ち捨てられ、放置されるという事はなかっただろう。いくらマゾ女相手でも、配慮に欠けるやり方だ。だが、肉便器であれば関係ない。折角愛す

る二人が濃厚なキスを交わして盛り上がっているのである、地面に転がしたオナホルの事など、心の底からどうでもいい。

「ぶはっ…」

二人の唇が、やっと離れた。長いキスであった。舌を差し入れたという訳ではない。ただ、互いに互いの唇をついばんでいただけだ。だというのに、二人は何分もかけて、愛を交わし合った。それほどまでに、互いが愛おしかったのだ。特に、発情してしまった隼鷹にとっては。

ただ、長いキスを終えて、少しばかり冷静になったらしい。隼鷹が、気恥ずかしそうに目を逸らす。武蔵は、優しく、それでいて楽しげな視線を送っていたが、目を合わせられなかった。

「あー、その、ごめんね…ちょっと、あてられちゃってさ」

ぼりぼりと、頬を掻く。発情が収まった訳ではない。むしろその逆で、真っ赤になった顔が示す通り、余計に疼いている。ただ、折角武蔵がオナホールでオナっているところを見せて貰っていたのに、発情してオナニーを中断させてしまった…その後ろめたさが、羞恥心を増幅させていた。

「ふふっ…構わないさ。あれも随分、国語が上手くなって…おねだりも上手になった。あてられてしまうのも、仕方ないさ」

ほら…と、武蔵が軽く顎を突き出した。二人の唾液で濡れた赤い唇が、てらてらと光っている。その唇が言っていた。いいんだぞ、と。続けてもいいんだぞ、ほら、もう終わりかい…と。

「ありがと、武蔵…♥」

隼鷹は、その誘惑に逆らわなかった。感謝と愛おしさが同居した言葉と共に、再び唇を接近させる。

「ん…♥ じゅる…♥ ちゅ、ちゅっ、ちゅる、ちゅうっ…♥」

今度は、最初から舌を差し入れた。隼鷹の舌が武蔵の口腔内に侵入し、武蔵の方でも、自らの舌を愛する人のそれに絡ませていく。二人の舌が絡み合い、のたうつ。その様子は、さながらナメクジが二匹、交尾しているかのようですらあった。いやらしい水音が部屋に響くが、それは雪肌の女があげ続けている壊れた笑い声と重なって、淫靡な交響曲を作り上げている。

「んじゅるっ…♥ ちゅ、ちゅるっ、ちゅ、ちゅうっ…♥ じゅ、じゅ、じゅうっ…♥ んじゅ、ちゅうっ…♥」

舌が絡み合う。隼鷹から武蔵に、唾液が送り込まれる。かと思えば、今度は武

蔵の舌が隼鷹の口腔に侵入し、武蔵から隼鷹へ向けて、唾液が送り込まれる。しかもその唾液は、全てが武蔵の唾液ではない。先程送り込まれた、隼鷹の唾液と混ざり合った、ミックスジュースだ。そのミックスジュースはやがて、二人の攻守交替によって再び、武蔵の口腔内へ送り込まれる。

その睦み合いは、もう、キスの範疇を越えていた。それは、セックスであった。口と舌を使った、セックスである。二人は、それほどまでに激しく、愛を交わし合っていた。

「んじゅう…♥ じゅるっ、じゅ、じゅうっ♥ じゅ、ちゅ、ちゅる…♥」

愛の交歓を続けながら、中腰になっていた隼鷹が少しばかり、腰を落とす。暫時、暗い中落とし物を探すように手を動かしていたが、やがて目当てのものをを見つけ、腰の高さを戻す。その手に握られていたのは、オナホールであった。

「んっ、ご、お おっ!?♥」

隼鷹の手つきは、器用だった。見えてもいないのに、オナホールにちんぼを咥えさせたのだから。顔を股間に押し付け、武蔵のちんぼを根元まで呑み込ませる。幸せにトリップしていた肉便器も、喉の奥まで突き入れられたちんぼに目を剥いて、苦し気な呻き声を漏らしている。

「じゅ、じゅっ、じゅっ、じゅうっ♥ じゅる、ちゅっ♥ じゅう、ちゅっ♥ ちゅるっ、じゅ、じゅるるっ♥ ちゅ、ちゅううっ♥」

だからと言って、キスは、お口同士のセックスは、中断されない。セッション相手たる肉便器の壊れた笑い声がなくなった、その寂しさを紛らせでもするかのよう、いやらしい水音はより一層高まる。同時に、隼鷹はオナホールの頭を掴み、乱暴に前後させ始める。

「おげっ!?♥ お、ごっ!♥ んごっ!♥ おげっ♥ えっ!♥ んげえっ!♥」

愛する人同士が熱烈なキスを交わす際、ただ口だけが触れ合うとは限らない。互いを抱きしめ合う事もあるし—実際、武蔵の両手は今も隼鷹の背中に回り、肩を緩く抱いている—互いの身体を擦り付け合う事もある。時には、愛しい人の性感帯を擦り、より大きな快感を与えようとする事もある。

隼鷹がしていたのは、そういう事であった。ディープキスをしながら、愛する人のちんぼを擦る。武蔵との行為において、数えきれないほど何度もしてきた事だ。ただ、今は手元にオナホールがある。であれば、手で竿を握って擦るよりも、オナホールにちんぼを咥え込ませた方がいい。

「んじゅ、ちゅ、ちゅううっ…♥ 好きい…♥ 武蔵、好きい…♥ ん、じゅるっ♥ ちゅ、ちゅるっ♥ ちゅ、ちゅ、ちゅううっ…♥」

唇と唇が離れた僅かな間隙を縫って、隼鷹の言葉が漏れる。大好きな武蔵への愛の言葉が、漏れる。その間、肉便器とは言えば、惨めな声をあげ続けている。隼鷹の手で頭を前後に動かされ、食道をちんぼで抉られ続けている。死にそんな声をあげながら一悦んでいる。

（これ、これっ、3P じゃない…♥ 私、完全にオナホ扱いされてる…♥ 道具になっちゃってる…♥ 肉便器になっちゃってるよお…♥ これすごっ、凄いい…♥ こんな、こんなのっ、おかしくなっちゃうよお…♥）

雪肌の女、その両手が股間に伸びる。もう、我慢できなかった。肉便器を望み、破滅を望み、道具扱いを望む彼女にとって、今のこの状況こそ至高のものであった。

絶え間なく食道を抉られ、窒息させられながら悶絶するほどの責め苦を受ける。だというのに、自分は二人の眼中にない。ただただ、オナホールとして、二人のセックスを盛り上げる道具として、使われる。最低だった。最悪だった。だからこそ一最高だった。この最高の状況で、我慢などできる筈がなかった。

（ああ、ぐるじい…♥ 苦しくて、苦しくて…♥ 気持ちいい…♥ もっとお…♥ もっと、苦しめて…♥ 息、できなくして…♥ 頭おかしくなるぐらい、苦しめて…窒息させて…♥ お願いします…♥ 私を、壊して…♥）

彼女の思考は、矛盾していた。道具として扱われる事を悦びながら、もっともつとねだっていた。道具の願いなど、聞き入れられる筈などないというのに。いや、そもそも道具なのであれば、オナホールなのであれば、願いなど持つ筈がないというのに…それでも彼女は、願っていた。もっと、苦しめて欲しいと。残虐の限りを尽くし、使い潰して欲しいと。壊して欲しいと。そう願いながら、オナっていた。両手の指が、それぞれまるで触手のように蠢いている。自らの性感帯を余すところなく刺激しようと、蠢動している。

「ちゅるっ♥ ちゅ、ちゅううっ♥ んちゅ、ちゅる、ちゅううっ♥ ああ、好きだよ、隼鷹…♥ ん、ちゅるっ♥ ちゅ、ちゅる、ちゅっ、じゅうう…♥」

そんな肉便器の様子を、武蔵も、無論隼鷹も、意に介さない。もし雪肌の女が、奴隷であったなら…性奴隷であったなら、また話は違っただろう。奴隷の癖にご主人様の許しもなく勝手にオナって気持ちよくなるなんて、これはおしおきが必要だ…そんな流れにも、なり得たろう。

だが、そうはならない。彼女は、オナホールに一道具に過ぎないのだ。道具が多少、利用者の想定しない動作をしたところで、そこまで目くじらを立てるだろうか。増して、道具におしおきなど、するだろうか。

「おごっ!♥ ごぼっ!♥ んごぼっ!♥ んごっ!♥ お、ぼおっ!♥」

彼女は、惨めな声をあげつつける。二人の愛の交歓に、最高の BGM を添える。同時に、食道を抉られる事でちんぼを擦り、武蔵に快楽を提供する。そういう、道具として求められる役割を、彼女は完璧に果たしていた。であれば、隼鷹も、武蔵も、オナホールに必要以上の注意は払わない。二人にとって重要なのは、あくまで、愛する互いの存在なのだ。

「ん、ぶはっ…♥ …ん…♥ 隼鷹、少し激しすぎるぞ…♥ もう、イってしまいそうだ…♥」

二人の唇が、離れる。互いの唇の間に、ねばついた唾液が作り出した橋がかかった。二人とも、唇だけでなく口元全体がどろどろだ。その口元を歪めて、武蔵が笑う。いまだオナホールを動かす手を緩めない隼鷹に、軽く抗議するような、何処か挑発するような視線を送る。こんなに激しくして、いいのか、と。

「ふふっ…♥ いいよ…一回、イこ?♥ 一回、軽くイっちゃお?♥ たまには、私の手で、イってほしいからさ…♥」

嬉しそうに微笑んでいる隼鷹の言葉は、いよいよ肉便器の存在を無視し始めた証左であった。隼鷹にとって、武蔵をイかせるのは、自分である。決して、この肉便器によるイラマチオではない。オナホールを動かす自分の手で、愛する武蔵をイかせるのだ。大好きな武蔵に、射精してもらうのだ。

「くす…♥ 仕方がない奴だ…♥ ほら…ん、ちゆるっ、ちゅっ…♥」

ならば、と、背中に回した手で隼鷹の後頭部を掴んだ武蔵が、愛する人の顔を引き寄せた。大好きな人の手でイかせて貰うのだ。それならば、キスしながらの方がいい…そんなところだろう。舌を絡ませながらちんぼをしごいて貰い、射精する。それは、幸せな体験となるだろう。

「んごおっ!♥ おごっ!♥ おぼおっ!♥ んげえっ!♥ おげえっ!♥」

しかし、現実には、隼鷹の手はオナホールを動かしてはいない。雪肌の女に、イラマチオを強いる…それが、行われている現実である。ラストスパートとばかりに加速した頭の動きは、ちんぼがより上げつなく食道を抉るという結果を生む。故に、その無様な呻き声も、より惨めさを増している。

（ああ、じめ…♥ 死んじゃう…♥ むりい、こんなのむりい…♥ 気持ちい

い…♥ 苦しくて、苦しくて…♥ 死にながら、いっちゃう…♥ いきながら、逝っちゃう…♥ いっちゃうよお…♥)

武蔵の限界が近付く中、彼女もまた、限界が近付いていた。もう、頭が回らない。打ち続くイラマチオによって呼吸困難は深刻となり、同時に、絶え間なく彼女を苛む嘔吐感が、思考能力を奪っていく。残されたのは、『キモチイイ』という感情のみ。キモチイイ。苦しいのが、キモチイイ。死にそうになるのが、キモチイイ。イきたい。逝きたい。気持ち、いい。ただただ、そんな事ばかりが頭の中で渦を巻き一絶頂に向けて、指はより激しく、蠢く。快楽に吞まれ、ひたすら緩慢になっていく思考とは対照的だ。クリトリスを弄るもの、陰唇をなぞるもの、膣内をほじくるもの—それぞれの指が、それぞれの触手のように、性感帯を責め苛む。その勢いは衰えるどころかいや増していた。

「じゅる、ちゅ、ちゅうっ…♥ んじゅ、ちゅっ…♥ んっ、じゅっ、んんっ、んっ、んんっ…!♥」

いよいよ、武蔵の絶頂に近い。尿道を、精液が満たし始める。鈴口に向けて、精液が移動している。僅かに膨らんで直後に少しばかり萎む、射精直前に特有の挙動が始まる。

(ああ、精液…♥ 精液来る…♥ いっちゃう…♥ 逝っちゃう…♥ 私、壊れる…♥ 嬉しい…♥ 壊して…♥ 壊して、壊して…♥ 私、肉便器になって、精液排泄されて、壊れ…♥ こわれ、こわ、こわれ、こわ、れっ…♥)

それは、肉便器としての本能のようなものだったろう。彼女は、今にも射精が始まろうとしている事を、敏感に察知していた。朦朧とした意識の中、遠のきつつある意識の中、それだけははっきりと知覚していた。そして—

「~~~~~
~~~~~っっっっっ!! !♥♥♥」

—意識が、ホワイトアウトした。

「じゅるる、ちゅ、ちゅるる…♥ ん、んんっ♥ んー、んーっ…♥」

武蔵が、満足気に射精している。鈴口から、精液を放射している。変わらず椅子に座ったまま、くつろいだまま、リラックスしたまま…愛しの隼鷹に口付けされながら、イっている。

雪肌の女もまた、イっている。白目を剥き、目から涙を、鼻から鼻水を垂らしながら。花のように美しく整った顔を、無様に破壊されながら。破滅の快楽に吞まれながら、イっていた。



「…♥」

どれぐらい、射精していただろうか。どれぐらい、顔を股間に押し付けられたままだっただろうか。雪肌の女と武蔵の股間が、最初に離れた。押し付け続けている隼鷹が、手を離れたのだ。白目を晒した彼女は、気を失って完全に脱力しており—重力に従って、倒れた。コンクリート打ちっばなしの床に、倒れ伏した。

「ん—ぶ、は…♥ ふふふっ…♥ こういうのは、久しぶりだな…?♥」

続いて離れたのは、隼鷹と武蔵、二人の唇であった。射精している間も続いたキスは、二人の愛の深さを示していたと言えるだろう。それ故にか、二人は幸せそうだった。大好きな相手を、気持ちよくしてあげられた喜び。愛する相手に、気持ちよくして貰えた喜び。その二つの喜びが二人の間で混じり合い、より深い喜びを生み出している。

「うん…♥ 大好きだよ…♥」

隼鷹が、武蔵に抱き着いた。椅子に座った武蔵、その太腿の上に乗るかのような体勢で、抱き着いたのだ。武蔵もそれに応えて、背中を力強く抱き締める。好きな人を離すまい、と。

「…♥」

その足元に転がるオナホールへの関心は、二人とも、欠片たりとて存在しなかった。白目を剥いて床に倒れ伏し、だらしなく開いた口から突き出た舌が床に垂れている彼女の様子を、二人は全く、気にかけていない。

所詮、彼女は肉便器であった。肉でできた便器であり、肉でできたオナホールであった。何処まで行っても、彼女は道具だったのだ。大人の玩具以上の存在では、なかった。やがて、武蔵と隼鷹がベッドに移動し、愛し合い始めたが—彼女は、そのまま打ち捨てられていた。遊び終えた後、後片付けもせず乱雑に転がされた玩具。それが、彼女だった。